

## ある夫人の肖像 —『迷える夫人』論—

田 江 安 廣\*

(1997年10月14日 受理)

A Portrait of a Lady: Cather's  
— A Lost Lady —

Yasuhiro TAE\*

### I

ウィラ・キャザーの『迷える夫人』(A *Lost Lady*, 1923) はクノップ版で178ページの小品ながら作品の密度、完成度の高さから諸家の評価は高い。E・ウィルスンのような留保付の讃辞もないではないが(「彼女は間接的にしか、ある感情、行動を描けないのだ。……ともあれ、『迷える婦人』は類まれな技法によって描かれた魅惑的なスケッチである」)<sup>1)</sup>「古典的なきびしさ」を獲得したというウィップル<sup>2)</sup>, 「恐らくほとんど完璧な小品, 彼女のエッセー「家具をとり払った小説」に描かれた彼女の技法の最良の例」<sup>3)</sup> というウッドレス, あるいはこの小説を19世紀の迷える夫人たち, 『ダーヴァビル家のテス』, 『アンナ・カレーニナ』, 『ある婦人の肖像』, 『ボヴァリー夫人』につながる作品と見なし, 若年のころ, この小説を読んで受けた衝撃について語るエデルのように, きわめて高い讃辞を送る評者も多い<sup>4)</sup>。『迷える夫人』を偉大なアメリカ小説と呼ぶのにためらいを抱く読者はあるにしても, 深く記憶に刻みこまれ, 後々まで心に残る小説と呼ぶのにためらいを感じず読者はきわめて稀であろう。

『迷える夫人』はキャザーが幼少のころ魅了されたサイラス・ガーヴァー州知事夫人をモデルにしていることはよく知られている。夫人の死を新聞で知り, 夫人への記憶があざやかによみがえって創作の契機となったのだった。長い間さまよっていた「美しい亡霊」<sup>5)</sup>は『迷える婦人』の中でマリアン・フォレスターというふさわしい身体を見出す。創作にあたって作者がまず考えたことはこのモデルの魅力を作者が感じたまま, そっくり主人公に定着させることであった。キャザーは「性格研究」でなく, 「肖像」を描きたかったと言っている。子供のころキャザーが魅せられたのは「爪先まで幸せな気分を満たしてくれた夫人の髪や笑い声」であった<sup>5)</sup>。夫人の魅力を語るため作者はニール・ハーバートという語り手を創出する。

\*鹿兒島大学教育学部

ニール・ハーバートはマリアン・フォレスターの魅力を最大限に作品に定着させるべく、キャザーが創出したマリアンの「副産物」であるが、同時に、彼はキャザーの内面を色濃く投影した人物であり、物語の劇的推進力、批判的解説者という役割を荷っている。マリアンの魅力、その仕草、声の調子、頭先から爪先までつぶさに語りうる人物にはどのような資質が必要だろうか。それは鋭い感受性、豊かな想像力、知性、そして教養である。ニールにはそのすべてが具わっているように見える。そのうえ彼が5才で母を失うという設定は女性、母なるものへの思慕を抱いて成長する少年を読者に予期させる。

ニールから見たマリアンの魅力は繰り返し語られるのだが、そのひとつをニールが木から落下して腕を骨折し、フォレスター家に運びこまれる場面に見ることが出来る。運びこまれたフォレスター家の部屋は「ひんやりとして、ほの暗く、静かだった。・・・自分の家だと病気がしたときはすべてが恐ろしかったのだが・・・フォレスター夫人は何てやわらかな手の持ち主なんだろう。何てきれいな女性なんだろう」<sup>6)</sup>。夫人はニールの看護をしながら、まだ幼ないニールの髪を撫で、額に軽く口づけする。「何ていい香り、彼女は何ていい香りがするんだろう」(P. 24)。ニールはこのときまだ12才、読者の中にはドストエフスキーの『初恋』を想起する人も多いかもしれない。この時点でニールの心にマリアンという女性の存在が深く刻印される。

上に引用した描写はニールが未だ幼いため夫人は視覚、触角、嗅角で外面的にとらえられているだけである。第三章ではニールは19才に成長している。成長したニールの見た夫人は相変わらず魅力的だ。「黒い、きらきら輝く美しい瞳」「ふくよかで水晶のようなライラックの肌」「もろさと優雅さ」「何を言わずとも多くを語っている口」。夫人に出会った人は「瞬時に虜となってしまう」のであり、彼女の魅力にはどのような鈍感な人間も抗しきれない。マリアンの夫、フォレスター大尉もニールに劣らない夫人の崇拜者であるが、彼の口からニールに、あるエピソードが紹介される。野の花を摘みに出かけたマリアンは牧場の囲いの中に入りこんでしまい、そこで牛から逃げまどうという仕儀にたち至る。彼女は笑い声をあげながら、兎のように逃げ回るのだが「その手には事のおこりとなった赤いパラソルをしっかりと握りしめたままであった」(P. 7)。彼女の性格の魅力をよく伝えるエピソードである<sup>7)</sup>。

ニールの視点に戻ろう。19才のニールは「長身の」「目鼻立ちのはっきりした」「性格の暗い」「きちょうめんな」「物事を批判的に眺める習慣」を持った人物に成長している。批判的なニールにさえ夫人の美貌、人をあきさせない機知と快活さはひとときわ輝いて見える。そのようなニールの前にフランク・エリンジャーという男性が姿をあらわす。年齢40才、6.2フィートの長身、「仕立のよいディナーコートの下に着けたヴェストはボタンを留めても少しもしわがよらないほど」がっしりした体格をしている。鼻はとがり、あごには深い切れ目があり、歯は真白で、鉄鋼を二つにかみちぎれるかと思うほどの屈強そうなあご。身体全体に漲る活力と自信。男盛りのエリンジャーに接しニールはそこに「何か邪悪なもの」(P. 42)を感じとる。ニールの不安は的中した。フランクとマリアンの関係は第四章でまず暗示され（「彼女が素早く向きを変えたとき、彼女のベルベットの服のす

そが彼のズボンのすそに絡まり、歩こうとしたとき摩擦で火花が散った。」P. 56), つづく第V章でブルム少年を目撃者として全能者の視点から、きわめて暗示に富む文章で描き出される。

彼(フランク)は座席の下の斧に手をのぼし、流れの方向に戻っていった。フォレスター夫人は目を閉じて、あごをマフに乗せて座っていたが、ほのかな、やさしい微笑が唇にうかんでいた。大気は静寂で澄みきっていた。ブルム少年には彼女の呼吸が聞こえるほどだった。斧をふるう音が流れの方から響いてきたとき、彼女の臉がびくびく動き、身体に弱い痙攣が走っているのが少年に見えた(P. 63)。

しかし夫人の秘密は未だ外に知られることもなくニールに知られることもない。ブルム少年は昔風だったし、夫人を特別視する少年はそれまでの夫人のやさしい態度に恩を感じていたのである。

やがて夫人の秘密は彼女の崇拜者であるニールの知るところとなる。フォレスター大尉が留守の間にフランクが町に滞在していることを知ったニールは「愛情と庇護」の気持から夫人の家へ朝露をついて出かける。早朝、やわらかな空、露を帯びた草花に「宗教的な純粹さ」を感じながら、「汚されぬ」朝もやの中で、ニールは夫人のために赤いバラを摘む。バラをブーケにして、夫人の寝室の窓枠に置こうとした刹那、寝室から女性の笑い声、次いで男の「間の抜けたような」「だらしない」「間のびした笑い声」を聞く。二人の声の聞こえてきた寝室はニールが少年のとき、腕を骨折して運びこまれ、看病を受けた部屋だった(P. 83)。

ニールは激しい衝撃を受ける。「顔はほてり、こめかみは激しく脈打ち、目は怒りで見えなかった・・・窓枠にかがみこんで立ち上がるまでの瞬間に、彼はこの世で最も美しいものの一つを失った」(P. 83)。作者はここでニールにシェークスピアのソネット(94番)をつぶやかせる。

「腐った白百合は」と彼はつぶやいた、「腐った白百合は雑草よりも悪臭を放つ」(P. 84)。

優雅さ、愛らしい声、黒い瞳の輝き、それらはみな無に帰した。ニールを何よりも怒らせたのは夫人が彼の理想美(aesthetic ideal)を粉々に砕いたからだった。美しいもの、輝かしいものはその背後に何か野卑なものを隠しもっているものなのかと、青年らしくニールは自問する。

妻を心の最後の砦として信頼しきっていた青年ブラウン、優雅さと洗練の華としてヴィオネ夫人を崇拜していたランバート・ストレーザー同様に、ここでニールは激しい「認識の衝撃」を受け、ために彼の無垢は永遠に失われる。成熟の背後には喪失があり、さらには深い絶望があるとはある心理学者の指摘しているところである。

ニールの受けた衝撃は発見から生ずる驚きである。そして「驚き」は川端康成の指摘するところでは「常に芸術において欠くべからざるものである・・・本当に立派な芸術であるためには、驚きはすなわち作者の人生における新しい発見であるべきだ。まず作者が驚くのでなければいけない。」<sup>8)</sup>

作者はニールと共に驚いているであろうか。この問に答える前に、何故、作者がフランクとマリ안의関係をまず全能者の視点からブルム少年を目撃者として示し、次にニールの視点からニール自身を目撃者として描くという二重の視点と構造を用いたかを考えなくてはならない。考えられることは夫人の崇拜者ニールの視点からのみニールによって語られる物語は単調に陥りやすいということである。終始、同じ声と同じピッチで歌われる歌を聞きつづけるのは退屈なものである。作者はまず全能者の視点を用いることにより、フランクとマリ안의関係を読者に提示し、ニールには伏せておく。この舞台でよく用いられる手法によって、読者は登場人物が未だ知らない事実を知るといった特権を与えられる。裏返して言えば、作者はニールの衝撃の発見まで時間をズラし、ニール自身によって発見させることでニールに「特権」を与えているのである。二重の視点の使用はかくして読者と登場人物に特権を与え、発見の衝撃の効果を巧妙に高めている。

作者はニールと共に驚いているだろうか。ニールの驚きは作者の驚きとして実感される。これは技法の卓越さもさることながら作者の描く対象への愛情がそう感じさせるのであろう。そうでなければニールの驚きが読者にあれほど鮮烈に伝わってくるはずがない。作者の想像力という湖から作品という湖に流れおちる滝が立てる音は読者をニールと同じほどに驚かす。

第Ⅸ章でニールはMITで建築を学ぶためフォレスター家に別れの挨拶に訪れる。夫人に対するニールの感情はくすぶりつづけている。2年後、再び帰郷したニールはフォレスター家を再訪する。フォレスター大尉は銀行倒産後、発作に襲われ身体が利かない。倒産の際、道義を重んじる大尉らしく、預金者を守る行為に出たために財産をほとんど失った。フォレスター家は没落の一途をたどるしかない。大尉を敬愛するニールは苦境にいるマリアンを救い出したいが事態は如何ともしがたい。彼は全く無力の傍観者ではないが、夫人の望むような手取り早い経済的援助という点では無力である。訪問のときニールが見た夫人はどう描かれているだろうか。「その肌はもはや白いライラックでなく、くちなしの象牙色を帯びていた・・・以前はなかったしわが口のあたりあった。しかし驚くべきことはこれからの変化が一瞬のうちに彼女の人格のきらめきの中で消え去り、消し去られて、彼女のこと以外すべてを忘れさってしまうことだった。」(P.111)夫人には以前、見られなかった「哀しげな微笑」「翳りを帯びた声」にニールは気づくが、彼に及ぼすマリ안의魅力は全く失われたわけではないことが分る。

金銭的に余裕のない夫人は精神的に少しづつ追いつめられてゆく。「あなたは成功しなくてははいけない」「お金はとても大事なものよ」(P.113)とニールに忠告し、倫理にもとるやり方で成功するのが成功するための唯一の方法ではないとニールが反論すると「でもそのやり方が手っ取り早いわ」とつぶやくほどである。夫人はきわめて現実的、プラクティカルになっており、またそうならざるを得ない。マリアンはまだ自分が若いと感じ、もう一度、人生を生きるエネルギーを内に感じている。それがあせりの気持ちを駆り立てる。彼女の考えることは只一つ、「この穴から抜け出すこと」だけである。そういう夫人をニールは不安と危具の念で眺めている。「女性がまだ若いといいはじめたとき、それは何か破綻をきたしたことを意味していないだろうか？」(P.125)

マリアンへの更なる幻滅は第2部で描かれる。フランクがコンスタンスと結婚したことを知り（コンスタンスのフランクへの尋常ならざる関心はフォレスター家にコンスタンスの家族が滞在したとき伏線として暗示されている）自分が捨てられたことを知ったマリアンは泥酔してニールの前にあらわれる。ずぶ濡れのマリアンの眉間には「酒や疲労にうち負かされた人間特有のしわ」があり、「ただ一つの目的のために懸命に意識を保って」いる。唇と目の下の黒いくまは「身体中に毒が回っているかのような」印象をニールに与える（P.131）。愛人に長距離電話をかければ交換手につつぬけになることから、ニールは夫人に分別ある行動をとるよう説得するが彼女の聞き入れるところではない。はじめは冷静に話していたマリアンも、こみあげてくる怒りに、その言葉は「一語、また一語と翳りを帯びて」くる。「やがて来たるべきものが来て」彼女が醜態を演じはじめたときニールは夫人に知られないよう電話線を切断してしまう。怒りをぶちまけたマリアンは机につっぷしたまま、うめくようなすすり泣きをはじめ。やがて彼女は泥のような眠りにおちる。ニールはマリアンを介護し、あとの面倒をおじに依頼すると、翌朝、夫人を家に送りどける。ここでのニールの行動は思いやりと良識に富んでいて非のうちどころがない。作者はニールを単なる「のぞき穴」（peeping hole into the world）と呼び、読者がニールを「愛すべき人物」と評していることを面白がっているが、読者がニールにひかれる理由のひとつはニールのこのような振舞いによるところが大きいと思われる<sup>9)</sup>。

フォレスター大尉が再度の発作で亡くなってしまうと夫人は完全に重心を失ってしまう。ニールとニールのおじの耳に入る噂は芳しからぬものばかりであり、夫人へのニールの幻滅はますます深まってゆく。

夫の死後、彼女は別人になってしまったように思えた。長い間、ニールとおじ、ドルジェル家の人たちや彼女の友人たちは大尉を彼女の足手まといだと思っていた。彼女を消耗させる心配の種だと思っていた。しかし大尉が死んでいなくなると、彼女は風が吹くたびにさまよう底荷を失った船の如くであった（P.154）。

それでも、夫人は夫人なりの考えで土地の若者を教化しようとしているらしい。この目的のため夫人は自宅で夕食会を催す。ニールはいやいや参加するが若者たちに苦勞して作った料理をふるまっても、料理の味とその意味、料理を作るのにどれほどの労力と時間を要したかが理解できるのはニールだけである。食事の席で、夫人は若いころ登山した際、崖から落下して両脚を骨折したが、大尉の一行に発見され、救助されたことを語る。落下のイメージはこの作品に繰り返される点で意味がある。ニールの木からの落下と片腕の骨折、夫人の崖からの落下と両脚の骨折、大尉の落馬。落下のイメージは無論フォレスター家の没落とニールから見た夫人の転落を表わしている。さて、夫人の話聞いた若者たちは一様に心を動かされる。このときニールは夫人がそれほど以前と変わっていないのではないかと思う。「ふさわしい人があらわれれば彼女を救える、今晚にでも

とニールは感じた。」(P.169)

第IX章でニールは大学へ戻る決意をする。早く土地を去りたいという気持と、一度土地を離れば二度と戻らないだろうという気持が交錯していた。子供のころから親しんだものすべてと別れることは彼をメランコリックな気分にする。この章でニールは三たび、決定的な夫人への幻滅を味わう。ニールの最も忌み嫌う心も姿も醜いアイヴィー・ピーターズとさえ夫人は関係を持つに至ったのである。夫人にとっては生きのびるための必要悪のつながりであるが、夫の死後、他の偉人の妻たちのように時代と共に美しく殉じることを拒否し、「何としてでも生きようとする」夫人をニールは許せなかった (P.172)。夫人は「下司な女」になりさがり、ニールは「心の内に、ものうい侮蔑の念を抱きつつ、別れも告げずに」故郷を静かに立ち去る (P.172)。

やがて歳月が過ぎ去ると距離の魔術によってか、夫人への記憶は「口惜しさを伴わず」「輝かしい、客観的な記憶」としてよみがえってくる。ニールは「夫人を知ることが出来たこと、人生に足を踏み入れるのに手を貸してくれたこと」を感謝する気持ちになっていた (P.174)。ある日、ニールはシカゴのホテルで出会ったエド・エリオットからその後の夫人の消息を聞く。彼女がブエノス・アイレスの富裕な牧場主と再婚したこと (マリアンは、ここでも赤いパラソルをさして牛に追われたのだろうか?) 会う人ごとにニールにことづてを頼んでいたこと、前夫フォレスター大尉の墓に供えるための花の代金を送りつづけていたこと、3年前に夫人が亡くなったことを知る。夫人が最後まで愛されながら死んだことを知ったニールは感謝する気持ちになっていた。

以上、概観したように、作品『迷える夫人』は、ニールから見た夫人という面においては、あこがれ、崇拜の念を抱いた子供の未熟な視点から、成熟した、より客観的な大人の視点に至るまでのニールの体験が語られている。作品を劇的にしているのはニールの心の揺れである。振り子は崇拜、讚美から幻滅、侮蔑へと大きく揺れ、最後には中間点へ振り子が戻って、大きな揺れは収まる。成人したニールは冷静に、より客観的に夫人をふりかえることが出来るようになっていく。

マリアンはタイトルの示すように、「迷える」夫人だったのだろうか。ニールの視点から見ても、客観的に見ても、たしかに彼女の行動は道を踏みはずした女性である。しかし、彼女自身は自分を「迷える夫人」と見なしていただろうか。マリアンには子供がなく、彼女のフランクとの関係が家庭に影響を及ぼした描写はどこにも見当たらない。この点が他の姦通小説と大きく異なる点の一つである。25才年上の夫、フォレスターはフランスの諺にあるように「すべてを知って、すべてを許して」いるのである。

ニールは大尉がどのくらいこのことを知っているのかいぶかった。今、丘を下りながらニールは大尉がすべてを知っていると確信した。他の誰よりも。マリアン・フォレスターについて知るべきことは他の誰よりも (P.116)。

マリアンは良心の呵責のため苦しんでいる様子は見えない。彼女の苦しみは自分がまだ充分、生

ききっていないうちに、田舎で朽ちてしまうのではないかという恐怖から生じている。ニールが彼女に求めるような時代と夫と共に殉じるにはマリアンはあまりに若く、あまりに生命力にあふれ、あまりに利己的すぎる（自己愛を象徴する水仙に彼女は擬されている）。時代の変化を察知し、それに対処しうる変わり身の早さと、何としても生き抜こうとするしぶとさ、勇敢さ、明るさを具えている。マリアンの逆境でのしぶとさは大尉の育てる「寒さに強い花」ヒアシンスによって象徴される。ウッドレスが指摘しているように、「キャザーがマリアンのお金、衣服、宝石、社交への欲求を嘆いたのと同じくらいに、彼女の強い意志、勇敢さをたたえていることは疑いの余地がない。」<sup>10)</sup> マリアンは19才のとき、すでに結婚式の日時まで定まった婚約者が元の交際相手の夫から射殺されるという体験の持主である。その窮地をフォレスター大尉との出会いによって救われる。チャンスをもう一度求めて生きようとするのはいかにもアメリカ的前向きな精神をあらわしている。そして忘れてはならないのはマリアン・フォレスター・コリンズが最後まで夫、フォレスターとニールを忘れ去ることがなかったという事実である。

## II

ニールにとってのマリアン・フォレスターがあこがれの対象、母性（一時的にはあるが）、美の具現としての存在であるとすれば、彼女の夫、フォレスター大尉はどのような存在として描かれているであろうか。ニールにとっての大尉は畏敬の対象、父親的存在、夢の具現者である。

ニールの母は5才で死に、父親はニールにとって失敗と敗北のイメージで色どられている。したがって、彼の家は「心地よい場所ではなかった」（P.24）。ニールが幸福を味わえる時間はフォレスター邸で、夜おそくまで読書をしたり、タバコをふかしたりしながらすごす時間である。発作で倒れた大尉の世話と夫人の手助けをするため大学を休学してまで夫妻に尽くすニールには「信念を持つ者のみが味わいうる満足感」がある（P.142）。かくして、フォレスター家はニールにとって「唯一無二の場」であった（P.142）。

敗北者としての実の父に代わる父親的存在はおじのポマリー判事、さらにはフォレスター大尉である。実の父はニールにとって生きるべき方向を指し示す負の父親像でしかあり得ない。ニールが生涯、独身を貫く決意をするのも、ニールの道義を重んずる性格形成もおじのポマリー判事の影響によるところが大きい。しかし、誰よりも彼が尊敬してやまない人物がフォレスター大尉である。フォレスター大尉の特質が明らかになるのはフランク・エリンジャー、アイヴィー・ピーターズとの比較に於いてである。エリンジャーが「如才のない、おうような、機略に富む」「時勢に逆らわず巧みに行動する」（P.45）人物であるのに対し、大尉は「信条、やり方を決して変えない」（P.44）人物である。エリンジャーの如才なさはマリアンから若いオグデン嬢に巧みにのりかえることであられ、狼のイメージで表現されている。一方、大尉の威厳、人間的な深み、良心は血に飢えた人夫たちのおこす騒ぎも彼が姿をあらわすだけでおさまったことや、なけなしの金を預金した人々を守るため彼がとった犠牲的行為に見ることが出来る。大尉をあらわすイメージは傷ついた象であり、

山である。「彼の休息しているさまは山の如くであった」(ついでながら、彼の友人パーリントン・ユタ鉄道の会長は熊のイメージで表現されている)(PP.44-45)。大尉の「重々しさ」は「不確実な人生」「謎めいて測り難い未来」を前にした若いニールにはいかにも深遠に見える。

夢を具現した人物としての大尉はオグデン夫人の依頼でスイート・ウォーターとの出会いを語る場面によく見ることが出来る。ロジッキーのように過去を回想しながら、大尉は一同に、若いころ西部にやってきたこと、南北戦争に従事したこと(このことから大尉と呼ばれるようになった)、貨物の運送に従事したことを語る。胸のすくような大空、波打つ大草原、レイヨウ、バッファローの大群、バイソンが水を飲みにくるラグーン、ハンティング。すべてが素晴らしく輝かしい日々。ある日、インディアン居住区近くのスイート・ウォーターを見た大尉は、心を奪われ、ここに家を建てることを自らに誓う。その証として、家を建てたいと思う場所に柳の木を植える。それから何年経ってもこの場所が彼の脳裏を去ることはなかった。時勢が芳しくないとき、彼は再びこの地を訪れ、鉄道会社から土地を買う。植えておいた柳は根を張り、木に成長していた。そして、彼は再度、家の角にあたる場所に3本の柳を植え、12年後に結婚したばかりのマリアンをつれてこの地に移り住む。大尉の意志の強さをこのエピソードはよく物語っている。マリアンに促されて自己の人生哲学を語る描写が次に続く。

そう、私の哲学は自分でも気づかず毎日、毎日、考え、計画しているものは必ず手に入るということだ・・・私の言う意味で、夢みられたものはすでに実現されたことなのだ。我々の大西部はそのような夢から発展してきた。入植者、採鉱者、工事請負人の夢だ。我々は、丁度私がスイート・ウォーターの土地を夢見たように山岳地帯に鉄道を敷くことを夢見たのだ(PP.50-51)。

大尉は偉大な夢想家であり、その夢を実現させるにふさわしい強靱な意志と器量を具えた人物である。彼は開拓者であり、建設者であり、夢の具現者であり、建設者のイメージによって体現されるアメリカン・ヒーローである。アメリカのアダムは無垢の精神で広野にいどみ、文明社会を築く。このヒーローは恋愛、結婚、家庭を重んじる社会人であり、キリスト教的モラルの守護者であり、常に前進をつづける人物である<sup>11)</sup>。

危険を恐れず前進する勇気とモラルを備えた大尉と際立った対照をなす人物がアイヴィー・ピーターズである。アイヴィーが最初に登場する場面はどの読者も容易に忘れることが出来ないだろう。その歩き方は「荒々しく、高慢」で「頭のもたげ方は反抗的で疑ぐり深いところ」があった。ピクニックを楽しんでいるニールたちを女々しいとあざけりながら、彼は木に止ったキツツキをパチンコで気絶させ、「万力のような」指でキツツキをはさみつけると、もっていた「ナイフの刃、釣り針、かぎ針、のこ、はさみ」などの入った箱からナイフの刃をとり出す。キツツキの目をナイフで傷つけるのはアッという間の出来事だった。「傷つけられたキツツキはラセン状に空中に舞い上がったかと思うと右に急激に曲がって木の幹にぶつかり、左に曲がって再び木の幹に激突した・・・上

に下に、前に後ろに、激しく羽根をバタつかせながら落下したり、舞い上がったたりするキツツキ」(PP.19-20)を目のあたりにした子供たちは完全に気が動転する。やがて巣にたどり着いたキツツキをみじめな運命から救ってやろうと木に登ったニールが落下するのはこの直後である。

アイヴィーは残忍な人物にふさわしく「蛇」や「とかげ」のイメージで描かれる。興味深いのは作者キャザーが「言葉」の発見によって自らのアイデンティティを確立するまで、幼少のころはこうした男性的な力の誇示に自らを重ねあわせていたというシャロン・オブライエンの指摘である。オブライエンによればアイヴィーはキャザーの「思春期」の自我像でもあったのである<sup>12)</sup>。

判事の犬を毒殺したり、キツツキを狂おしい死に至らしめたときのアイヴィーは18才か19才であるが、成人しても彼の性格は根本的に何ら変わっていない。マリアンや大尉に対する態度はがさつであり、無礼であり、傲慢であり、根本的に良識を欠いている。彼が手に入れた土地はインディアンをだまして不正な手段によって手に入れたものであり、大尉の愛する土地を今は手に入れ、それを干拓することで自らの力を誇示し、大尉に低俗な仕返しを試みる。ニールの見たアイヴィーと大尉は次のように対比される。

旧西部は崇高なまでに非現実的な夢想家たち、大きな心を持った冒険者たちが住んでいた。礼儀正しい兄弟愛、攻めるに強いが守るに弱い、征服は出来るが持ちこたえることは出来ない。今や彼らが勝ちとった土地はアイヴィー・ピーターズのような男たちのなすがままである。あえて何にも挑まず、危険な事は決してやらない。彼らは蟹気楼を飲み干し、朝のすがすがしさを追い払い、偉大な自由の精神を、おうような、ゆったりした土地所有者の生活を根絶しにしたのだった。空間、色彩、開拓者の高貴なくつろぎを滅ぼし、マッチ工場がそうするように太古の森を小さな木片にきざんでしまったのだ (P.104)。

アイヴィーは現実家であり、安全志向であり、利潤追求のためには不正もいとわない。ニールの言葉を用いれば「道徳心の欠如した」「芯のない」人物である。しかし流れはフォレスター大尉からアイヴィーの様な人物の時代へと確実に変化している。他の誰よりもこのことを認識しているのがフォレスター自身である。彼は何時間も日時計に見入っている。「目に見えるかたちで時が奪われてゆく」日時計を眺める大尉を未来志向の夫人は恐怖の面持で眺めている。しかし大尉が眺めつづける日時計の基盤は岩でできている。岩は永遠性を象徴する。大尉は永遠の相の下に物事を眺めているのである。達観した大尉に苦悩は無縁である。

ウッドレスは大尉の身体の麻痺を時代の変化に適應できないメタファーとして解釈し、大尉に批判的である。作品のテーマを喪失と新しい時代の可能性との調和と見るウッドレスは喪失を大尉に見出し、可能性を夫人に見るのである<sup>13)</sup>。(ニールはフォレスターに象徴される輝しかった時代の残光を眺める証人である。)なるほど大尉は新しい時代に適應しないかもしれないが、彼の非適應は彼の能力というより、その信念から生じていることを忘れてはならないのではなかろうか。さ

らに大尉の精神的遺産はニールに受けつがれてゆくと考えることが出来る。この意味で大尉は敗北者ではない。

大尉からの精神的遺産の継承は象徴的に示されている。パーティーの席上、ニールは夫人から家長の席に座るよう依頼され、肉の切り分けを頼まれる。言うまでもなく、狩猟民族において獲物を料理したとき、その肉を切り分け(carve)、一座の者に分け与える人物こそ、その中心人物であった。この名残りから一座の中心人物が家父長のイメージとなり、肉を切り分けるというイメージと結びつくのである<sup>14)</sup>。ニールのおじと大尉は肉を見事に切り分ける人物として描かれているが、ニールがその業を受けついでいることはおじや大尉の精神的遺産を受けついでいることのメタファーである。主の席にニールを座らせ、肉の切り分けを頼んだマリアンはニールにそれだけの精神的成長を見い出しているのであろう。さらに、大尉の建設者としてのアメリカン・ヒーローの特質は建築家としてのニールに引きつがれる。ここでも大尉の精神的遺産の継承がメタフォルカルに表現されていると考えられる。父親的存在としての大尉から、ニールはまちがいない、その精神的遺産を子として継承したのである。

キャザーは新しい時代に対し批判的になっていったことから、輝かしい過去へのノスタルジアが強まり、過去を美化する傾向があるという批判が存在する。しかしながら川端康成を引用して言うなら、「作者が主題を見い出したと知っているときは、必ず何か自分の性質に深く発するものが環境とぶつかって音を立てて」いるのである。そして「この音こそ作品の主題」なのだ。

しかし「その音をとらえたと思っても、小説ではもう一度その音を発するにいたった外界を、読者の心にもそれと同じような音となって響くように組み立てねばならぬ。」<sup>15)</sup> (P.60)

過去をなつかしむと言って作者を批判するのは易い。しかし、川端康成の言う作家の深い所から発するものと環境とがぶつかって立てる音を、読者の心に響くようにこれほど見事に再構築できる作家の技量をこそ読者たる我々は讃美すべきなのではなからうか。

#### 注

- 1) Edmund Wilson, "Two Novels of Willa Cather" in James Schroeter ed., *Willa Cather and Her Critics* (Cornel University Press: Ithaca & London, 1976), PP. 27-28.
- 2) T. K. Whipple, "Willa Cather" in Schroeter ed. P.38.
- 3) James Woodress, *Willa Cather: Her Life and Art* (University of Nebraska Press: Lincoln, 1970), P. 205.
- 4) Bernice Slote and Virginia Faulkner ed., *The Art of Willa Cather* (University of Nebraska Press: Lincoln & London, 1977), P. 234.
- 5) L. Brent Bohlke ed., *Willa Cather in Person: Interviews, Speeches and Letters* (University of Nebraska Press: Lincoln & London, 1986) P. 77.
- 6) Willa Cather, *A Lost Lady* (Alfred A Knopf: New York, 1983), P. 23. 以下、同書からの引用はページのみを示す。
- 7) この場面は筆者にマラマッドの小説 *Dubin's Lives* の一場面を想起させる。主人公ドゥーヴィンがふと気づいてみると妻キティが庭先で踊っている。しかし、これは彼の思いちがいで、妻の服にハチが入りこみ、これを追い払おうとしたときの一連の動きが彼にはダンスに興じているように映ったのだった。
- 8) 川端康成、『小説の研究』(講談社学術文庫, 1987), P. 60.

- 9) Bohlke ed. P. 77. 大雨はむろんマリ안의内面を象徴したものと見なしうる。
- 10) James Woodress, *Willa Cather: A Literary Life* (the University of Nebraska Press: Lincoln, 1987), P. 350
- 11) 亀井俊介, 『ハックルベリー・フィンは、いま』(講談社学術文庫, 1991年)
- 12) Sharon O'Brien, *Willa Cather: the Emerging Voice* (Oxford University Press: New York & Oxford), P. 90.
- 13) Woodress, *Willa Cather: A Literary Life*, P. 349.
- 14) 渡部昇一, 『英語の語源』(講談社現代新書, 1981) PP. 146-149.
- 15) 川端, P. 52.